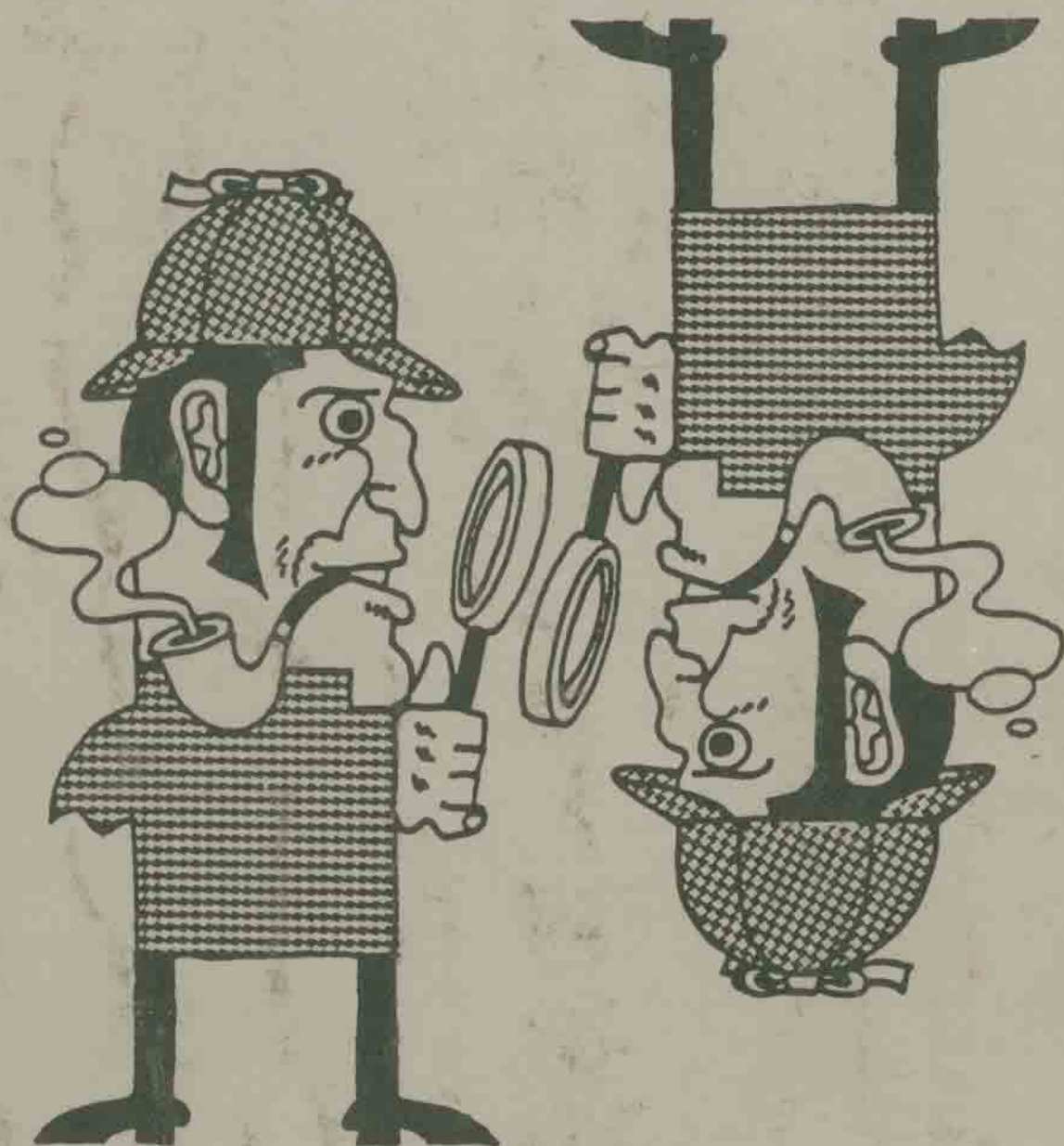




名探偵退場

定価七二〇円

著者 桜井 一

発行者 土井 勇

発行所 株式会社 青樹社

東京都千代田区三崎町二一六・七

電話 〇三(二六四)六九〇四

郵便振替 東京・一、四七六四八

郵便番号 一〇一

本文組版 株式会社カネコ

製版 北耀プロセス株式会社

印刷 誠宏印刷株式会社

製本 土開製本株式会社

発行年月日はカバーを御覧下さい。

落丁・乱丁本はお取り替え致します。



日文 701503916

209690



お茶の水
図書館
蔵書

88分書物語

名探偵速場

探偵小説

青樹社



BIG BOOKS

桜井一

この小説に現われる田舎は架空のものである。

登場する人物も場所もすべて架空である。

だから本書の警察活動もまったく出鱈目であろう。

CONTENTS

第一話	警察嫌い	五
第二話	死せる金貸し	一九
第三話	線と点	三五
第四話	黄色の研究	五一
第五話	奮闘！ 誤算	六七
第六話	大野暮春彦短片集	八五
第七話	凡人殺人事件	九七
第八話	野良猫ホームズ	一一一
第九話	オリエント休行の殺人	一二五
第十話	七つも顔を持つ男	一五一
第十一話	刑事ゴロンボ	一六五
第十二話	変人二十面相	一七七
第十三話	仁月と大鴉	一九五
第十四話	モルグ街のオランダ靴	二二三
第十五話	現金に手を出せ	二三五
解説 青木雲助		二六〇



警察嫌い

午後一時かつきりに八六分署の刑事部屋の電話が鳴った。受話器をとった伽羅きやらはぶつきらぼうに応えた。

「こちら八六分署」

「もしもし、自分は露寺谷ろじや巡查長ですが、その声は伽羅警部殿でありますか……」

「ああそうだ。きさまらが陰で助平の伽羅と呼んでいる助平伽羅だよ」

「そんな……あの……自分はそのようなことは……」

「うるさい。さつさと用件を言ったらどうなんだ」

「あ、はい、実は殺人事件が発生いたしました……それで……」

「なんだと……、殺人事件だと……」

伽羅は思わず手にした受話器を睨みつけた。まるで電話の相手がそこにいるかのように。
「さ、殺人事件だと言ったな。そんなものは発生させるな、いいな、わかったな。わかったらすぐに電話を切っちゃえ」

「でも、もう発生してしまったんですよ、警部殿」

伽羅はもう一度受話器を睨みつけてみたが、そんなことで事態が変わるはずがない。

「ふん、そうか、すでに発生してしまったものはしかたがない……が……俺は殺人事件なんて扱ったことはないぞ」

「自分だって同じですよ。それで、応援をよこしていただきたいと思ひまして……」

露寺谷の心細げな声を聞きながら、伽羅は無意味だとは思つたが刑事部屋を見回してみた。そういうわざとらしいことをするまでもなく誰もいないことはわかつていた。

「あいにくだがみんな日之出食堂のサービスランチを喰ひに出払ちまつて、今は俺一人だけだ。サービスタイムは一時半までだからな。かといって俺がそつちへ出向いて署を空っぽにするわけにはいかんし……あつ、ちよつと待て。こんなときに帰つてきた気の毒な奴が一人いる……ああ、前野刑事のようだ。すぐそちらへ行かせるから安心しろ」

伽羅から命令を受けた前野は、早々と捜査用の白い手袋をつけながら八六分署の玄関を出た。なにも署から手袋をつけて現場に出向く必要はないのだが、彼は警官になつて初めて経験する大事件に緊張していたのだ。

署の玄関脇にある駐輪場へ回つた前野は、一台の白塗りのパトロール用自転車を引きずり出した。八六分署の、平巡査から署長に至る署員の誰一人として運転免許証を持ってい

ないから、当然ここには、あつても何の役にも立たないパトカーはおろか白バイ一台も置かれていない。八六分署は警察活動の足のほぼ全てを自転車に頼っているのである。その自転車にすら乗れない署員も一人だけいるのだが、その話はまたの機会に譲る。

パトロール自転車に跨ろうとした前野は、わずかに前輪がぐらついてゐるのに気づいた。どうやら車軸のナットがゆるんでゐるらしい。

他の自転車に乗り代えようとしたとき、駐輪場の片隅にころがっている手ごろなレンチを目にした前野は、それで前輪のナットを締め直した。前野の実家は今でも大阪で自転車屋を営業しているくらいだから、彼自身もいつのまにか簡単な修理はできるようになつていた。

レンチは自転車の荷台に取り付けてある白い金属箱に収めて蓋をした。どうやら父親の、道具は大切に扱うといった職人気質までも引き継いでしまったようだ。それが証拠に、彼は捜査用の白手袋を汚すことなく修理できた自分の腕に満足を感じてゐた。

こうして前野舞也刑事は、あらためてサドルに尻を落ち着けると、弱々しくペダルを漕いで八六分署を後にした。自転車ならともかく、殺人事件などどう扱つていいのか見当もつかないのだから、どうしたつて脚も氣も重くなる。

八六分署は昨年までは東京都下・泥草村の駐在所にすぎなかった。ところが私鉄系大手

不動産会社が泥草村に、分譲と賃貸の巨大団地を建設した。その名も八六分台団地という。たちまち人口が膨張した泥草村は、町を飛び越えて市に格上げされることになった。すると村役場は市役所に、村道は市道に、公会堂は市民センターにと呼び名がスマートになる。こうなると、泥草市ではあまりに泥臭いから新しい市に相応しい市名を付けようという住民運動が起きた。その際、市役所の庁舎や小中学校の校舎をはじめ公共施設の一切合財を寄贈した大手不動産会社の発言力が大きくモノを言って、泥草村は「八六分市」と改名されたのである。

「八六分」というのは東京駅からの所要時間である。つまり、東京駅からたったの一時間と二十六分で来られる街ですよという意味の、大手不動産会社のCMコピー的な市名である。ま、茨城県の日立市、愛知県の豊田市と似たようなものだと思ってもらえばいいだろう。

この改名に従って、泥草村駐在所は署、すなわち八六分署（当然「はちじゅうろつぷんしょ」と読むべきで、「はちじゅうろくぶんしょ」と読むべきではないが、そう読みたい人はご自由にどうぞ）に出世して、駐在所に出入りしていた数人の平巡査はいきなり署長や警部や刑事として勤務する事になってしまったのである。ずいぶんいい加減な話だとは思いますが……。

さて、殺人現場は八六分市市長・八雲六郎の豪邸である。八雲邸は市の南西のはずれにあつて、八六分署からは約四キロの地点になる。このあたりは国立の大病院などが立ち並ぶ病院街のせいで自然林が多く、まだまだ武蔵野の風情が色濃く残されている。

巡査からいきなり刑事になつたばかりの前野も、やはり殺人事件の捜査など初めて経験することだから、おっかなびつくり八雲邸の豪壮なかまえの門をくぐつた。

今や遅しと待ちかまえていたように、露寺谷巡査長が邸内の脇道から飛び出して前野を迎えた。白手袋が光る手をあげて敬礼する露寺谷の顔は今にも泣き出しそうである。

「おう、ご苦労さん」

前野も敬礼を返してから声をかけた。

「で、どうなんだ」

「はい、自分の靴の踵のあたりが剝がれそうでありまして、ガバガバしておりました。実に歩きにくいのであります」

「おまえの靴底のことなど聞いちゃいない。事件だよ、殺人事件はどうなっているんだ」

「はい失礼いたしました。この裏庭の方で、市長の八雲六郎氏が何者かに何物かで後頭部を殴打されて死んでいるのであります」

「よしわかった、すぐ調べてみよう」

「あ、その前に前野刑事殿……」

露寺谷が必死の形相で前野の自転車にしがみついている。

「なんだ」

「もしや金槌のようなものをお持ちではないでしょうか。靴底を修理いたしたいものですから……」

「そんなもの俺が持つてゐるはずが……いや、そうだ、荷台の箱を開けてみる。中にレンチが入っているはずだから……そうそう、それだ、それを使ってもいいぞ」

「はっ、ありがとうございます」

自転車を引きずるようにして前野は裏庭へ回った。なるべくゆっくりぐずぐずと。

露寺谷巡査長も、ゆっくりぐずぐずと靴底の応急修理にかかった。裏庭へ行く時間を一分でも一秒でも遅らせたかったのだ。

彼は昨年警察官になったばかりなのに、村が市になったおかげで今年是否応なく巡査長を命じられてしまった。テレビや小説や新聞報道で殺人事件を傍観しているだけならわりあい好きだが、自分が捜査するなんてまっ平ご免だ。こんなとき平巡査なら野次馬や交通の整理でもしていればいいのだから気が楽だ。死体を見たりいじくったりする必要もない。ところが巡査長ともなるとそうはいかない。だいたいこの巡査長とは何なのだ。

警察官の階級は九段階に分かれている。最高位に警察庁長官がいるがこれは階級外である。階級の一番上は、1・警視總監で、以下順に、2・警視監、3・警視長、4・警視正、5・警視、6・警部、7・警部補、8・巡査部長、9・巡査となっている。そう、警察官の正式な階級制度の中には巡査長なんてのは見当たらない。かといって特別な任務を帯びた別格というわけでもない。ありていに言ってしまうえば、いつでまでも出世できない平巡査の士気を高揚させるための便宜的な階級なのである。8・巡査部長と9・巡査の中間に位置付けられる。しかしかなる長であろうと長が付けば責任は重くなる。でも月給袋は軽いままだそうだ。

とうとう露寺谷の靴底は直ってしまった。彼はさほど重くもないレンチを重そうに持つて裏庭へ回った。半分ベそをかきながらいかにも嫌々と……。

殺人現場の八雲邸の裏庭。よく手入れされた芝生の上に死体となった八雲六郎が横たわっている。その後頭部にはすでにどす黒く固まった血がこびり付いている。

前野と露寺谷の捜査は、なにしろ生まれて初めての殺人死体を目前に見るのだからさっぱり要領を得ない。

露寺谷にいたっては、恐る恐る死体を覗いては近くのベンチの上に開いた手帳に飛び付く。そしてわずかばかりの発見とも言えぬ発見を長々と書き留めるのであった。捜査用の

白手袋をつけたままなのできわめて文字が書きにくいことをいいことに、死体に近付かなくてもよい時間を少しでも伸ばそうとしているのだ。

冬も間近いその日は風が強かった。ベンチに開けた手帳のページがめくれてしまわぬように、露寺谷はレンチを重し代わりに使って重宝していた。

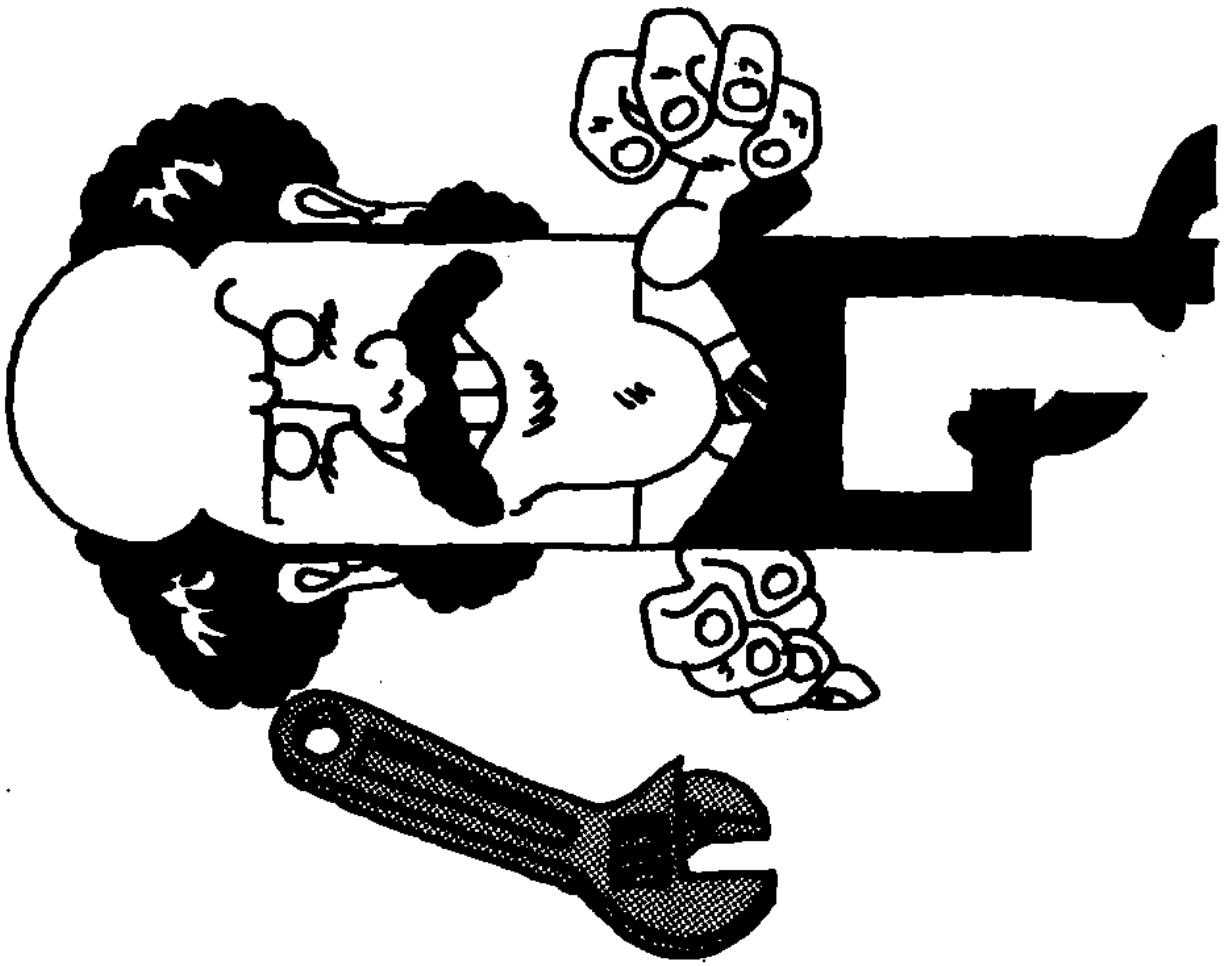
「何かわかったことはあるか」

前野とて死体など見たくもないから、すぐに顔をそむけては何かと露寺谷に話しかける。

「は、被害者^{ガイシャ}の名前は八雲六郎であります」

「そんなことは言われなくてもわかっているよ」

「八雲氏は当市の市長であります」



「そんなこともとづくにわかっている。ついでに八雲氏は男性ですとでも言いたいのだらう」

「いいえ、そこまでは断定できません……まだパンツの中までは見ておりませんので」

「あっちへ行け！」

そこへ八六分署から応援の春刑事^{はる}が駆け付けた。駆け付けるとは表現しにくいほどのんびりした歩調ではあるが。

これまた殺人事件など初めての春は、白手袋をつけた手で目を半分隠すようにしてなるべく死体が見えないようにしている。春はうんざりした口調で捜査の進展を前野に尋ねた。「うむ、たいしたことはわからん。そのベンチの上のレンチの下の巡査長の手帳の記述を読んでくれ。彼が何か書いていたようだから」

春刑事は重し代わりのレンチを無造作に死体の脇に放り投げてから、開かれた手帳の上を這いまわっているミミズを見ていた。しかしそれはよく見るとミミズではなく文字であった。彼はやがて手帳のページを繰る手を止めて露寺谷を呼び寄せた。

「ここに『外傷は後頭部の出血を伴う裂傷のみ。T・鈍器による。O・これが致命傷』とあるのだが、このTなる記号は何かね」

「あ、はい。TというのはTABUNの頭文字であります、春刑事殿」

「……たぶん……ね。ふん、それじゃ次のOも何かの頭文字かね」

「はいさようです。OSORAKU……おそらくの頭文字でして……」

「たぶん……と……おそらく……。それなら同じ記号でも意味は通じるじゃないか」

「それは、つまり……文学的な配慮でして……」

「あっちへ行け！」

やつと伽羅警部も殺人現場に顔を見せた。T・サービスランチを喰って帰った署長に駆け付けろと命令され、O・渋々やって来たに違いない……と春刑事は考えた。

伽羅はもう、最初から死体に背を向けて立っており、見るつもりも触れる気もまったくないらしい。これ以上はできないような不機嫌な顔つきで、白い手袋をはめた右手の人差指を前野と春の鼻先に代わる代わる突き付けた。

「どうなんだ、捜査の状況は」

「それが……いくつか確認された事実があるにはあるのですが……」と前野。

「しかし肝心なことは未だ何一つわかっておりません」と春。

「肝心なことだと、肝心なこととは何だ」

「たとえば犯人です」

「あたりまえだ。犯人が割れれば事件はチョンだ。他には」